

私たちの住む沖縄の自然

6年生の修学旅行が11月2～4日に予定されています。学校では見たり聞いたり、体験したりすることが難しいことも、修学旅行中に見聞きし、知識を広げていきましょう。さて、沖縄本島の自然のようすを少し紹介していきます。

私たちの住む沖縄県は、大小100あまりの島々からできています。そのうち、沖縄島は、沖縄県で最も大きな島で、琉球列島（九州の南端から、波照間島までの約1200kmにわたる範囲・動植物の分布の区切り）のほぼ真ん中に位置しています。

沖縄島の地質は、大きく3つに分けられます。

東シナ海から太平洋側に古い地層で、本部類帯（古生代から中生代にかけてたい積）、国頭類帯（中生代から新生代にたい積）、島尻類帯（新生代にたい積）と続いています。

土の色や性質も違います。北部地域は、粘板岩が変化してできた土で、国頭マーヅと呼ばれ、赤っぽい土、中南部地域は、石灰岩が変化してできた島尻マーヅ（こげ茶っぽい土）と、ねん土質のジャーガル（灰色っぽい土）からできています。

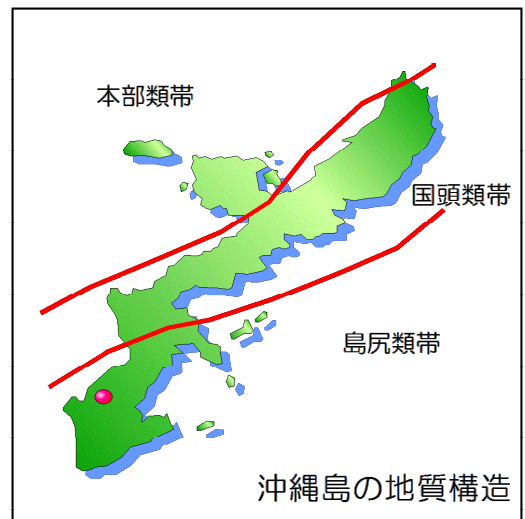


北部の山のイタジイ林

那覇からバスに乗って、高速自動車道を通っていると、西原町や中城村あたりでは、灰色のジャーガルの土が見られます。これが、沖縄市の子ども国を過ぎた頃から、赤っぽい国頭マーヅの土の色に変わっていきます。ぜひ、バスの窓から土の色を確かめてみてください。

土の性質は、母岩（ぼがん）によって決まります。それによって、生える植物の種類が決まり、それを食べる昆虫が集まります。さらに、その昆虫を食べる鳥や、小動物が集まってきます。土地によって、生き物の種類が変わる原因の一つなのです。

（文責：玉村かおり）



沖縄島の地質構造

